（３）大用中学校

学　校　長　　田辺　長美
校内研究代表者　大野　理絵

１．研究主題　　「生徒の思考力・判断力・表現力を高める授業づくり」

２．主題設定の理由

本校の生徒は年々減少し、本年度は２・３学年だけの６名である。昨年度より生徒数は減少したものの、どの生徒も素直で真面目に何事にも最後まで取り組めるし、学年間の仲もよい。家庭や地域の皆さんの継続した力強い協力もあり、生徒たちは感謝の気持ちと地域の一員としての自覚をもって活発に学校生活を送っている。生徒の学校生活満足度や自己肯定感も高く、これまでの地域と連携したふるさと教育の取組が成果へとつながっている。

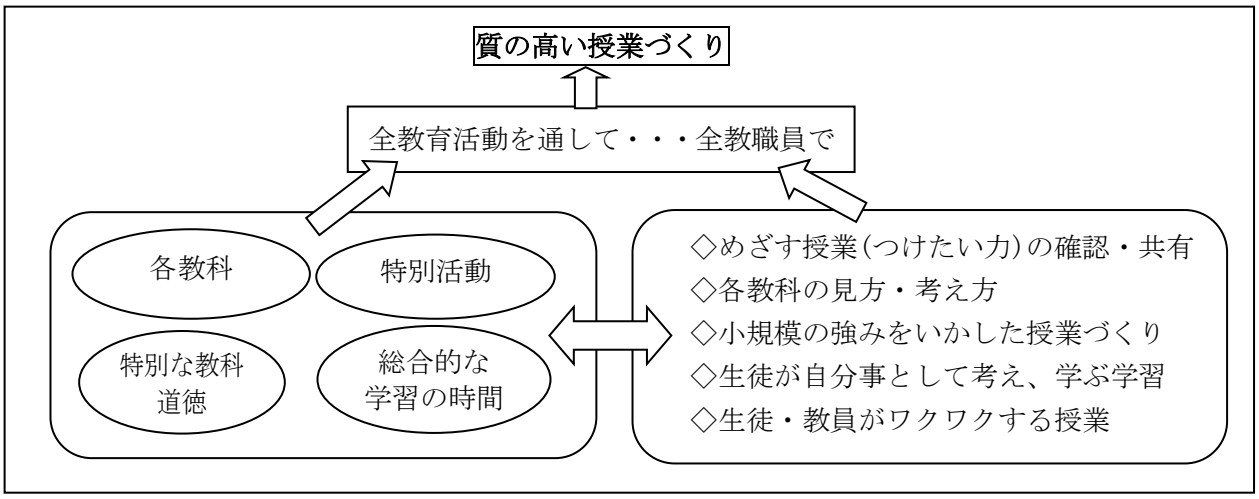
学力については、全国学力・学習状況調査や高知県学力定着状況調査において、各教科とも全国平均を上回るなど、一定の学力が定着している。しかし、日々の学習の様子や学力調査の結果から、活用の場面において、語彙力が少なく読解力に弱さがあったり、根拠を明確に論理的に説明・表現したりすることに弱さが見られる。また、少人数のために授業での対話活動や多様な意見を練り合うことで自分の考えを広げ、深めることにも難しさがある。

将来、生徒が活躍する社会では、様々な情報を見極め、必要に応じて活用することが今より一層重要となることが考えられる。そして、一人一人が様々な状況や変化に対応し、周囲と相互に理解し合い、協働しながら課題を解決することがより求められることも予想される。

そのような力をつけるためにも、各教科で「主体的・対話的・深い学び」をめざした授業改善に取り組み、生徒の力をさらに引き出したいと考え、研究主題を設定した。

３．研究の進め方と方法

（１）校内研修日を水曜日に定めて、年間計画に沿って研修をする。
（２）全校研究授業を１人１回行うこととし、授業改善プランの授業公開と兼ねる。その際、事前に全教員で指導案検討を行う。指導主事を招聘し、研究授業と協議において助言指導を受け、全員が授業改善につなげる
（３）教科担当者が１名であり、学習指導要領をもとに各教科の見方・考え方を定期的に共有する。
（４）教科横断的な視点を大切にし、生徒が主体となる体験活動や地域交流のあり方を研究する。
（５）小学校と連携し、ふるさと教育についての合同研修会及び相互に授業参観・研究協議を行う。



４．具体的な取り組み

（１）学力向上に向けた取り組み＝授業改善

①研究授業・公開授業

６月２１日(火)　２年英語「Let’s Read 1 History of Clocks」
６月２２日(水)　２年社会「日本の近代化と国際社会」
６月３０日(木)　３年理科「生物の子孫の残し方」
１０月１２日(水)　３年数学「２次方程式」
１０月１８日(火)　２年理科「動物の体のつくりとはたらき」
１０月２０日(木)　２・３年道徳「月明かりで見送った夜汽車」
１１月２１日(月)　２年英語「Stage Activity 3 My Favorite Place in Our Town」
１２月１３日(火)　３年社会「私たちの暮らしと経済」

②小中合同校内研修

５月１８日(水)　２年社会「日本の特色と地域区分」
３年数学「因数分解」
７月２７日(水)　講話「ふるさと教育」について　　全体協議
講師　四万十市地域おこし協力隊

（２）教科横断的な取り組み

① NIE ノートの活用

◇毎週木曜日に国語の宿題として提出している。
生徒が気になった記事を切り抜き、切り抜いた新聞記事を貼付し、記事の内容が簡潔にわかる語句や文章、心に残った文章にマーカーで着色し、記事の感想を書く活動を年間を通じて行った。

〈図１　生徒の NIE ノート〉

② 「特派員だより」への投稿

◇月１回程度、全校生徒が高知新聞「特派員だより」に記事を投稿した。年度当初は、集会で全校生徒が直近の学校行事や体験活動等を振り返り、生徒がそれぞれに題材を選択して記事を書いていた。１学期後半からは、「高知県全域に情報発信したいこと」として、生徒が自由に考えや意見を書くようにした。投稿前には校内で記事を回覧し、生徒の考え等を共有するが、誤字脱字以外の添削・修正はほとんど行わないようにした。掲載された記事は校内に掲示した。

〈図２　新聞掲載コーナー〉

③ 学校新聞づくりコンクールへの参加

◇自分たちが住んでいる地域のすばらしさを多くの人に知ってもらい、来てもらうことで地域の活性化につなげたいと６名全員がアイディアを出し合い、魅力ある新聞づくりに取り組んだ。構成内容については、生徒全員が話し合いを重ね、体験活動や学校行事、地域の方とのインタビュー、地域の絶景を紹介する内容で作品を完成させた。生徒たちが役割分担を決め、インタビューでの事前質問を考えたり、写真撮影場所を実際に歩いて探したりすることは、地域への思いを深めると同時に、伝えることの楽しさと難しさを知るよい体験となった。作品は作成段階で複数回、校内展示し、教職員や保護者、来校者に見てもらい、コメントをもらうとその都度修正を繰り返し完成させた。

（３）授業改善に向けての取り組み

①めざす授業を校内で共有し、つけたい力を確実に定着させることとした。そのためには、単元計画、指導計画、めあてとまとめの設定を行うこととした。

②校内研修の指導案検討・事後検討では、学習指導要領解説をもとに各教科の見方・考え方を共有した。

③小規模校の実態を強みとした授業づくりをめざした。

・生徒が楽しめる授業…教員がお膳立てした内容を聞いておぼえる授業からの脱却

・教員が教え過ぎない、伝えすぎない姿勢を意識する。（教員の待つ姿勢の重視）

④生徒が自分事として考え、学ぶ学習を意識して取り組んだ。

・生徒が考える、調べる、生活と関連づけた授業の工夫

・生徒が困る・考える場面の設定、上手なやる気のくすぐり

⑤全教員のこれまでの経験とアイディアを出し合い、柔軟な対応で授業をしようと確認した。

⑥授業の振り返りとして、学期に１回授業力チェックシートを使い、結果を校内研修で分析し、授業の改善点や以後の取り組みを確認することで、授業改善・授業力向上に役立てた。

⑦各教科において積極的に各種コンクールや検定へ出品、挑戦させることで、生徒の意欲を高めるとともに教科横断的な視点を意識した。

５．今年度の成果と課題

（１）成果

①授業改善プランとも兼ねて全員が研究授業・公開授業を行うことができた。事前に指導案検討及び展開・発問を考え、事後協議を行うことで、各教科の見方・考え方を共有することができた。

②小中学校が相互に授業参観を行うことで、児童生徒の実態を共有するとともに小学校から中学校へと段階的な指導ポイント等を協議することができた。

③定期的な「特派員だより」への投稿や各種コンクールに積極的に取り組み、全員の新聞掲載及び上位入賞をすることができた。

④授業改善を意識して取り組み、高知県学力定着状況調査　観点「思考・判断・表現」において、５教科平均で県及び全国を上回ることができた。（県＋26.3P、全国比＋23.6P）
また、解答形式「記述」においても５教科平均で県及び全国を上回ることができた。（県比＋31P、全国比＋29P）

（２）課題

①各種学力調査等での「思考・判断・表現」や「記述」において、教科により正答率に差がある。教科横断的な視点を一層大切にして授業改善及び教科指導の工夫が必要である。

②各教科指導において、生徒が疑問をもち、自分事として考え生活と関連づけて課題解決できるよう、単元計画や授業構成を工夫する。

③教科間連携をさらに進めるために、学習指導要領をもとに各教科の見方・考え方を全教員が定期的・計画的に共有し合う。

④生徒が意欲的に授業に取り組むよう、生徒の視点を大切にした模擬授業を行い、授業構成等を協議する。

⑤教科により差があるタブレット活用について、情報交換や実技演習を計画的に行う。